

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 4 日現在

機関番号：25406

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24530712

研究課題名(和文) サポート・ネットワークの生成モデルの構築 - 地域生活支援のために -

研究課題名(英文) Constructing a generative model for a community based social support network

研究代表者

大下 由美 (Oshita, Yumi)

県立広島大学・保健福祉学部(三原キャンパス)・准教授

研究者番号：00382367

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、以下の4つの成果が得られた。一つ目は、生成的なサポート・ネットワークの理論的枠組みが、廣松の四肢構造論を取り入れることで洗練された。二つ目は、面接における技法の連続的使用法の定式化が示された。支援者の各メッセージを構成する複数の変容の目的を、主/副に区分し、それらを循環的質問法を中心とした技法群の類型で示し、ネットワークを生成する過程で用いた技法の連続的使用法を考察した。三つ目は、問題解決過程におけるネットワーク生成の力動性の変化を示す、効果測定の実施手順とその実際が、具体的な事例において示された。最後は、サポートネットワークの生成モデルに基づく国際的な臨床共同研究が開始された。

研究成果の概要(英文)：This research generated four clear results as follows: First, the a clear and sophisticated definition of the support network was generated, from the point of view of mutual feedback loop process wherein a material object is personalized and a person is materialized. Second, the categorization of intervention skills in the therapy was systematized. Each of the social worker's therapeutic messages which have plural purposes, are divided into a main purpose and a secondary purpose and categorized based on the categories of circular questions. Third, the development of measurement methods for the generative processes of the differentiation of the elements which composed meaning construction and behavior selection was illustrated using a case study. Fourth, an international clinical research program for a generative support network was started. The client in the United States dealing with irritable bowel syndrome was able to generate, more a functional, life-script through this approach.

研究分野：包括的家族支援論

キーワード：サポート・ネットワーク 生成モデル 社会構成主義 CMM理論 循環的質問法 効果測定

1. 研究開始当初の背景

(1) サポート・ネットワークの生成モデルの構築の必要性

従来のサポート・ネットワーク研究は、数量的研究が中心であり、調査対象者（以下対象者）の社会サービスの利用数や頻度、関わっている専門家の数を把握し、それらと対象者の健康状態との関係性を明らかにしてきた。それに対し、サポート・ネットワークが少ないあるいはネットワークが機能不全状態にある対象者に対し、サポート・ネットワークを増やすあるいは改善するという、サポート・ネットワークの生成論については、これまでほとんど議論されていない。対人支援論を志向する場合、単なるネットワークの構造の調査研究を超えた、治癒力を有するサポート・ネットワーク生成モデルの新たな構築が要請される。

(2) サポート・ネットワークの生成モデルの基礎理論および技法論の構築の必要性

サポート・ネットワークの生成モデルの構築には、基礎理論および変容技法論が体系化されていなければならない。不適応状態を作り出す関係者間のネットワークを、機能的なネットワークに変容するための、変容生成の基礎理論およびそこでの専門家の関与方法である技法論の体系化が求められるが、それらの研究も、ほとんど手つかずの状態である。

(3) 効果測定法の研究の必要性

サポート・ネットワークの生成モデルの研究に限らず、ソーシャルワーク実践において、効果測定法の研究は、必要な研究であるが、その進展がほとんど見られない。これまでの効果測定法としては、量的測定法であるシングル・ケース・デザインがあり、それを用いた研究は、複数報告されている。しかし利用者の語りへのアプローチという、社会構成主義的視点に基づく実践においては、その効果測定法の研究、つまり、問題生成過程とその変容の力学を測定する方法は、国内だけではなく国外でも、ほとんど研究されていない。

2. 研究の目的

以上の背景から、以下のことを目的とし、本研究は実施された。

(1) サポート・ネットワークの生成モデルを構築すること

保健、医療、介護福祉領域の専門家は、クライアントが社会復帰あるいは地域生活を継続する上で直面する課題の解決を支援しなければならない。本研究においては、基盤研究（研究課題番号 20530520）の研究成果に基づき、上記の課題に耐えうる基礎理論体系と技法論より構成される支援モデルの構築を目指す。

(2) 洗練されたサポート・ネットワーク理論と技法を体系化すること

変容の標的であるミクロレベルの対人トランズアクション過程を理論化した上で、そのパターン化により生成する家族システムというメゾレベル、さらにその背景システム群の生成力学に関しても説明力を有する、これら諸レベルより構成される力動的サポート・ネットワーク理論を体系化する。同時にこれらの対人システムレベル群において、モノの意味構成が生成する力学に関しても説明力を有する理論体系の構築を試みる。さらに、ミクロレベルの人とモノとの相互生成が、システム全体のメカニズムの変容力にしていくために、ミクロレベルでの技法使用と、メゾ、マクロシステム全体にまでその差異化の力学を波及させる技法を体系化する。

(3) システムの変容力学の効果測定法の体系化とその実施手順の定式化を図ること

効果測定法として評価が高いシングル・ケース・デザインは、単一事例を生活場面と切り離して測定するモデルである。それに対し、本研究の測定法は、対人関係の文脈のなかで問題とその解決法との生成力学の変化を測定する方法を示す。この測定法は、社会構成主義的観点を採用し、トランズアクション過程での微細な差異生成を明確化したうえで、問題増幅あるいは、その解決過程にまで、差異生成の力学が拡大するメカニズムの測定を試みる。

3. 研究の方法

(1) 基礎理論

サポート・ネットワークの生成的構造の枠組み作りを、廣松渉の四肢構造論を取り入れて試みる。廣松は、所与としてのモノと、それがモノとして社会的な物になる所識と、所与としての人と、ある社会的な人になる所識を四肢として説明した。この四肢構造とその生成力学の理論とが、トランズアクション過程を説明する枠組みとして本研究では採用される。つまり、本論において使用される理論枠は、現実構成過程においては、人は役割遂行者としてモノ化され、またモノは人的な意味を付与され、人的なモノとしてヒト化され、両面が相互連関的に新たな「～として」の世界の意味を生成するという、四肢構造を用いた生成論である。さらに、この四肢構造論の枠組みに、ミクロレベルでの対人世界生成の説明力に優れるクロネンたちのCMM (Coordinated Management of Meaning) 理論を取り入れ、さらに体系的な発想を取り入れることで、サポート・システム全体の、より詳細な人とモノとの相互生成過程の説明理論が体系化される。

(2) 変容論

技法の類型化と連続的技法の使用法については、まず、ソーシャル・ワーカーの質問は、複数の変容の意図によって構成される。それを踏まえたうえで、質問技法の多義性と連続性理論を提示する。さらに、本モデルで

の技法論の中心である、CMM理論を技術化した、循環的質問法とそれと併用される解決志向や逆説処方技法群をまとめ、人とモノとの相互生成過程を説明するための技法分類の体系を提示し、その略記号表を作成する。そして、逐語記録により、これら分類された技法を用い、一つ一つのソーシャル・ワーカーの質問法を分類し、一つのメッセージにおける複数の変容の意図を主分類と副分類に区分する実例が示される。

(3) 効果測定法

効果測定法に関しては、変容手順と連動する効果測定の手順を示す。クライアントの問題の訴えのレベルと訴えを構成する具体的な出来事の要素のレベルとを区分し、後者のレベルでの効果測定法を実施するための手順を明確化する。そして、実際の事例において、問題場面の生成力学の測定と介入により生じた新たな生成力学を測定し、両生成力学の差異を効果測定として視覚化する手法を提示する。この出来事の要素に焦点化した変容力学の測定により、出来事全体の変容力学やさらに出来事群としての家族システムの変容や、その背景であるサポート・ネットワークの変化を詳細に論じることが可能になる。

4. 研究成果(主な位置づけ、インパクト)

(1) サポート・ネットワークの生成を説明する基礎理論が定式化されたこと

本論においては、廣松の四肢構造論を取り入れることで、人とモノの相互生成過程を説明できる理論的土台が示され、さらにこの土台と、ミクロなトランズアクション過程の説明力を有するCMM理論との結合法が提示された。さらに、システム的な視点を導入することで、CMM理論によりトランズアクション過程の説明力を付与された四肢構造論は、ミクロなトランズアクションレベル、トランズアクション群のレベルというように、サポート・システムの新たな評定力や変容力を有することが論じられた。

(2) 技法使用の定式化の研究が進められたこと

新たに類型化された循環的質問法を用い、モノと人世界とを相互変容する手法が示された。さらに、ソーシャル・ワーカーの治療的メッセージは、複数の目的を持って伝達されることが明らかにされ、それらを主分類と副分類に区分する手法が提示され、それらの技法群を連続的に使用する手法も示された。また、循環的質問法および本モデルで使用する技法群は体系化された。その略記号はTable 1にまとめた。これらの略記号は、面接の逐語記録の中で、支援者のメッセージの分類に用いられる。

Table 1 Categories of intervention techniques (Oshita and Kamo, 2013)

Categories of techniques		Abbreviation	
I Circular Questions		CQ	
1. Difference Questions		DifQ	
1) Category Differences	a) between persons	CDa	
	b) between relationships	CDb	
	c) between perception/ ideas/ beliefs	CDc	
	d) between actions/ events	CDd	
	e) category difference in past	CDe	
	f) category difference in future	CDf	
2) Temporal Differences	a) between past and past	TDa	
	b) between past and present	TDb	
	c) between past and future	TDc	
	d) between present and future	TDd	
	e) between future and future	TDe	
3) Ordering a Series of Differences	a) distinction made by one person	OSDa	
	b) distinction made by several people	OSDb	
2. Contextual Questions		ConQ	
1) Categorical Contexts	a)	-1 meaning to action	CCa1
		-2 action to meaning	CCa2
	b)	-1 content/ speech act	CCb1
		-2 speech act/ episode	CCb2
		-3 episode/ relationship	CCb3
		-4 relationship/ life script or family myth	CCb4
		-5 family myth/ cultural pattern	CCb5
-6 mixed	CCb6		
2) Temporal Contexts	a) behavioral effects in a dyadic field	TCa	
	b) behavioral effects in a triadic field	TCb	
	c) behavioral effects in larger fields	TCc	
II Solution-building Questioning Techniques		SBQT	
1. Exploring the exception		EE	
1. Miracle question		MQ	
1. Scaling question		SQ	
1. Getting by question		GQ	
III Paradoxical techniques		PT	
1. positive reframing		PR	
1. paradoxical prescription		PP	

その技法の連続的使用例は、以下である。以下は、Universal Journal of Public Healthに掲載された拙論(雑誌論文)で示した、ソーシャル・ワーカーのメッセージの意図をもとにカテゴリー化した質問技法の略記号とその記述法を示したものである。

1SW: I wonder if your refusal might have an important meaning for you....What benefit might you get now by refusing your medication? (CCb4/ Ccb2, Ccb3)

2Y: ...Benefits?...what?....I can't imagine any benefits.

3SW: OK...So...Well...in that case, are there any outcomes in which you could stop worrying about something by refusing your HAART medication? (CCb2/ CDd)

下線部の記号の表記は、以下のことを意味している。ソーシャル・ワーカーは、1SWのメッセージで主として意図したのは、クライアントYのLife-scriptを文脈とした関係性定義についての差異の記述を促すことであ

った(主分類としてのCCb4)。そして、この質問法は、次の局面でソーシャル・ワーカーが質問法として選択可能な、出来事定義を文脈とした行為選択(CCb2)、あるいは関係性定義を文脈とした出来事定義(CCb3)の記述の質問が、福分類として挙げられ、「/」の後ろ側に記載されている。この「/」の後ろ側に記載された質問法の内、どれが実際に選択されるかは、クライアントの応答次第である。もちろん、ソーシャル・ワーカーの想定内ではない応答に対しては、新たな戦略が立てられる。上記の過程では、2Yの応答から、3SWでCCb2が主分類として選択された。これは、1SWから3SWに続くソーシャル・ワーカーの質問技法が、文脈の質問を軸に、抽象的なレベルでの差異化を意図した質問から、より具体的なレベルでの差異化を意図した質問へと連続的に選択したことを示している。このように、ソーシャル・ワーカーの使用技法を、その意図から主分類と副分類に区分し、その選択法の理路の説明を試みることは、効果的な差異の生成技法を理論的に考察する研究方法の開発といえる。これは、本研究における独創的な研究結果であると考えられる。

(3)効果測定法とその実施手順を定式化したこと

サポート・ネットワークの変容力学を測定する効果測定法が考案され、その実践事例への適用が示された。新たに定式化された手順は、クライアントの訴えを出来事群に分解し、その出来事群の中の一つの出来事を取り上げ、その意味構成と行為選択を要素とするシーケンスを、クライアントの記述と支援者の質問法によって明らかにし、それらをBalesの相互作用の 카테고리を用いてカテゴリ化を行う。その記述されたシーケンスの要素の一つを介入ポイントとし、それへのリフレクションを試み、要素の差異化を試みる。それを実際の生活場面で実施してもらい、実施した場面をシーケンスの要素のレベルで記述してもらい、記述された要素を、Balesの 카테고리を用いてカテゴリ化を行う。この手順を、具体的な事例において採用し、問題場面のシーケンスの生成力学の変容を、オリジナルな3次元グラフを用いて示した。

今回の事例では、介入を試みた3回の問題場面のデータをグラフ化し、その力動性の変容過程を示した。この3次元グラフの作成は、MMIE (Measurement Method of Intervention Effects)としてプログラム化されているものを使用した。その実践事例への応用の実際は、雑誌論文 および図書 の第7章、第8章において詳細に考察された。図書 で示した3次元グラフの一部を以下に示す。

このような実践と連動した効果測定法の提示は、社会構成主義的アプローチにおける効果測定法が、理論的に示されただけでなく、臨床活動の効果測定法の開発研究の活性化に貢献すると考える。

化に貢献すると考える。

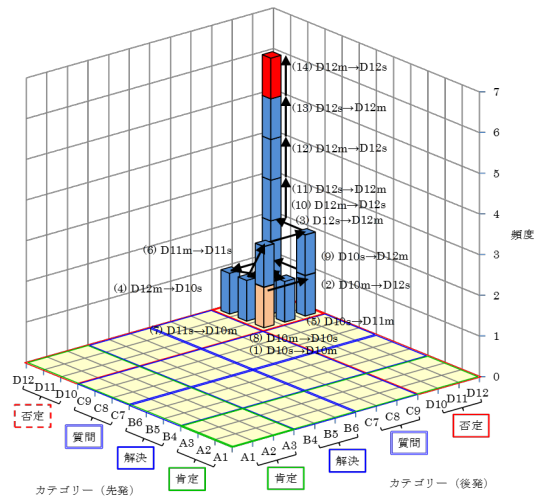


図1 介入前のシーケンスの力動性

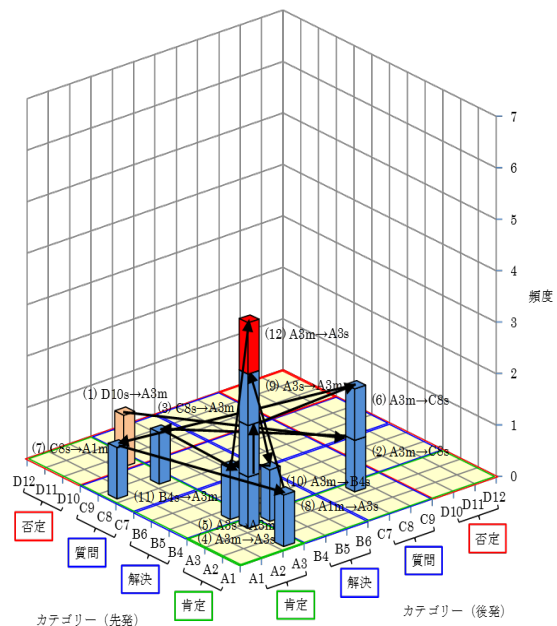


図2 介入後のシーケンスの力動性

(4)国際共同研究が開始されたこと

生成的サポート・ネットワークの生成モデルに基づく国際的な臨床共同研究が開始された。2014年9月~2015年2月において、University of Michigan, School of Social Workの客員研究員となったことで、同大学のGant教授との臨床共同研究体制を作ることができた。Gant教授の担当する慢性疾患(過敏性腸症候群: IBS)を有し、社会適応に困難を抱えているクライアントに対し、研究代表者のサポート・ネットワークの生成モデルに基づく、評定と介入計画をGant教授に提示し、Gant教授によりその変容活動が行われた。その結果、社会適応レベルの改善を実現することができた。この事例における実践過程を逐語に起こし、Gant教授と共に、本モデルに

おける変容のための問題場面の記述段階（特にモノについての要素化した記述法）と問題場面として記述された要素群へのクライアントによるリフレクションを促す段階（モノの要素化とその意味の差異化、それを文脈とした対人的意味のリフレクション）という2段階の変容法について、議論を継続している。

このようなソーシャルワーク分野の臨床共同研究体制の開拓は、これまで臨床分野ではあまり例がない。異文化間の研究者にとっても共有可能な基礎理論、変容論、技法論、効果測定論が体系化された、サポート・ネットワークの生成モデルを基盤とした結果であると考える。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 4 件)

大下由美・加茂陽 短期の現実再構成モデルの効果測定法、家族心理学研究、査読有、第27号、2013、1-15頁。

Kamo Kiyoshi, Oshita Yumi and Okamoto Harumi (2014). Multiple Reflection Model of Social Work Practice. Japanese Journal of Social Welfare. Peer review, 54 (5), 1-10.

<http://www.jssw.jp/journal/pdf/2014-54-5-1.pdf>

Oshita Yumi and Kamo Kiyoshi (2014). A New Intervention Skills and Measurement Methods for Clinical Social Work Practice. Japanese Journal of Social Welfare. 54 (5), 11-22.

<http://www.jssw.jp/journal/pdf/2014-54-5-2.pdf>

Oshita Yumi (2016). Narrative Social Work Practice for HIV/AIDS Clients. Universal Journal of Public Health. 4 (2), 108-119.

DOI: 10.13189/ujph.2016.040210.

〔学会発表〕(計 9 件)

大下由美・加茂陽「介入システムの変容過程の測定法」、第53回日本社会福祉学会九州部会大会、2012年6月23-24日、久留米大学。

Oshita Yumi and Kamo Kiyoshi. (2012) Community Organization for Elderly People with Dementia Symptoms. Kitakyushu Active Aging Conference in Asia-Pacific. 北九州国際会議場。

Oshita Yumi and Kamo Kiyoshi. (2013). Constructing a Family Therapy Intervention and Measurement Methods. International Academy of Family Psychology, Tokyo Conference.

Oshita Yumi (2013). The Multi-professional Team Approach to Family Therapy. International Academy of

Family Psychology, Tokyo Conference.

藤本いづ穂・大下由美 「子どもの問題行動への解決志向的アプローチの実際」、日本児童養護実践学会、2014年、東京。

大下由美・加茂陽 循環的質問法の構築、第32回日本家族心理学会、2015年、山形大学。

加茂陽・大下由美 循環的質問法の構築、第32回日本家族心理学会、2015年、山形大学。

東幸子・大下由美・横井麻耶 手話言語による相談援助モデルの構築 記述とリフレクション技法を中心に、第48回日本社会福祉学会・中国四国大会、2016年、山口県宇部市。

唐澤美加・大下由美・今中元基 手話を母語とするろう者とその家族への支援論、第48回日本社会福祉学会・中国四国大会、2016年、山口県宇部市。

〔図書〕(計 1 件)

大下由美・小川全夫・加茂陽編著 『ファミリー・ソーシャルワークの理論と技法 社会構成主義的観点から』九州大学出版会、2014年、A5版、総271頁。

〔産業財産権〕
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大下由美 (Oshita Yumi)

県立広島大学・保健福祉学部・准教授
研究者番号：00382367

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

加茂陽 (Kamo Kiyoshi)

県立広島大学・保健福祉学部・名誉教授

Larry, M. Gant (Larry, M. Gant)

University of Michigan, School of Social Work, Professor.